

保育者養成と社会福祉実習 — (3)

三角 同*, 保延 成子*, 吉川 裕子**
(平成17年10月6日受理)

Educational Training of Nursery Nurses and Social Work Practice — (3)

MISUMI, Hitoshi HONOBE, Shigeko and YOSHIKAWA, Yuko
(Received on October 6, 2005)

キーワード：保育者養成, ソーシャルワーク実践, 社会福祉施設

Key words : nursery training, social work practice, institution of social welfare

この法律において「次世代育成支援対策」とは、次代の社会を担う子どもを育成し、又は育成しようとする家庭に対する支援その他の次代の社会を担う子どもが健やかに生まれ、かつ、育成される環境の整備のための国若しくは地方公共団体が講ずる施策又は事業主が行う雇用環境の整備その他の取組をいう⁽¹⁾。

I. はじめに

私たちが児童学科児童学専攻における「社会福祉実習」の指導を担当するようになって、相当の時を経た⁽²⁾。また児童教育専攻の実習指導にかかわって3年が過ぎようとしている⁽³⁾。そして本年(2005年2~3月)は育児支援専攻3年の初めての实習であった。

表1は児童学科3専攻における福祉関係科目を平成12年度及び14年度にわたって示したものである。

表1 福祉関係科目 ()内は単位数

	平成12年度 カリキュラム	平成14年度 カリキュラム
児童学専攻	1. 社会福祉概論(2)	1. 社会福祉概論(2)
	2. 児童福祉論(4)	2. 児童福祉論(4)
	3. 社会福祉演習 I (2)	3. 社会福祉援助技術総論(2)
	4. 社会福祉演習 II (2)	4. 社会福祉援助技術各論(2)
	5. 養護原理(2)	5. 養護原理(2)

	平成12年度 カリキュラム	平成14年度 カリキュラム
児童学専攻	6. 養護内容演習(4)	6. 養護内容演習(4)
	7. 児童福祉演習(2)	7. 児童福祉演習(2)
	8. 社会福祉事業方法論 (含む実習) (4)	8. 社会福祉事業方法論 (含む実習) (4)
児童教育専攻	1. 社会福祉概論(2)	1. 社会福祉概論(2)
	2. 社会福祉演習 I (2)	2. 社会福祉演習 I (2)
	3. 社会福祉演習 II (2)	3. 社会福祉演習 II (2)
	4. 児童福祉論(4)	4. 児童福祉論(4)
	5. 福祉レクリエーション論(2)	5. 福祉レクリエーション論(2)
	6. 老人福祉と障害児福祉(2)	6. 介護福祉論(2)
	7. 児童福祉演習(2)	7. 児童福祉演習(2)
	8. 社会福祉事業方法論 (含む実習) (4)	8. 社会福祉事業方法論 (含む実習) (4)
育児支援専攻	/	
	/	
	/	
	/	
	/	
	/	
	/	
	/	
	/	
	/	

* 児童学科 保育科

**教職教養科

また表2は3専攻の2004年度における実習機関別数を表したものである。

表2 専攻別・機関別数 (2004年度)

専攻実習機関	児童学	育児支援	児童教育
児童相談所	1	10	3
児童館 (学童保育を含む)	31	34	25
子育て支援センター	7	10	3
障害(児)者施設	17	9	3
病後児保育		2	
社会福祉協議会		1	1
福祉事務所	3	1	
乳児院	3	1	
児童養護施設	1	1	
母子生活支援施設		2	
老人福祉施設	2		
ヒューマン・サービスセンター		1	

*期間
 ↙ 児学・育支 (2～3月)
 ↘ 児教 (7～9月)

II. 実習に至るまでのプロセス

育児支援専攻のカリキュラムは表1に示したとおりである。取得しうる資格、免許から児童学専攻のものと大差はないといえよう。まず一年次の「社会福祉概論」であるが保育士のための必修科目でもあり全員が履修していた。二次次の「児童福祉論」及び「社会福祉援助技術」の総論、各論も同様であった。

三年次に「養護原理」が前期におかれ夏休みに実施される「保育所」及び「施設」での実習オリエンテーションが担当教員によってなされている。私たちとしては保育実習のⅡ(保育所)およびⅢ(施設)の選択履修の希望を聞きながら、2～3月に行なう実習の場を決めていくことにした。参考文献として2003(平成15)年8月に刊行した児童学専攻の実習報告書「これからの生活を考える(9)」を配布し、実習先を決定していった。そして

冬休み中に各自、実習機関を訪問するなどして意欲を喚起していった。同時期に実施する児童学専攻の学生との調整を図りながら表2に示すような実施状況となったのである。

実習中の巡回指導も大変であったが、何人かの教員の援助を得て何とか終わることができた。そして4年の前期に反省会を行ない、そのレジュメをもとに報告書「みんなで子育て支援—少子社会の克服をめざして」を作成し、育児支援専攻の初めての実習を終えることができたのであった。

III. 学生たちへのアンケートから

実習を終えた学生たちに無記名でアンケートを行なった。

まず(イ)履修の動機であるが

- ・資格取得のため(社会福祉主事任用資格)。
 - ・社会福祉施設で実習してみたかったから。
 - ・保育園、幼稚園だけでなく、子どもや福祉全般について知りたかったから。
 - ・実際に体験して、知識、経験、視野を広げたかったから。
 - ・地元で実習をして、自分の住んでいる地域の様子をみたかったから。
- などと答えている。

次に(ロ)実習先の決定について書いてもらった。

- ・自分の暮らしている地域の中から探した(併せて、希望通りという意見が多かった)。
- ・保育実習をもとに、それらの関連する福祉施設や児童館などに決定した。
- ・その他、育児支援専攻であることを生かせる施設を探した(子育て支援センター、児童相談所、医療施設、障害者施設など)、あるいは、第一希望ではなかったが、実際に実習してみると学ぶべきことが多かったのではよかった、という意見もあった。

(ハ)実習先の雰囲気についてはどうであろうか。

- ・実習生の受け入れ態勢もよく、家庭的な雰囲気の中で、よい実習が出来たと思う。
- ・実習生に対して親切で大変勉強になったが、職員の方々が忙しく、ゆっくりと話ができなかった(児童相談所や福祉施設)。
- ・保育園や幼稚園と違い、和やかだった。
- ・その他、職員は一人一人意見を持ち、お互いにぶつか

り合いながらも、本当に子どものことを考えており尊敬した、という意見が多い中、表面上は仲のよさそうな職員同士であったが、そうとは言えない雰囲気も垣間見えた、というような意見もみられた。

(二) 時期については

- ・春休みという長期的な休みの中で行ったので、実習に集中できてよかった。
- ・利用者が少なくなる季節なので、夏休みなど、子どもの多い時期がよい。
- ・まとめの時期、来年度の準備などで忙しかった。など、多少の実習時期の違い（2月上旬や3月下旬）や施設の状況によって、学生たちの評価の違いが生じるもの、春休みでよかったという意見が多かった。

(ホ) 実習中の費用（交通費、昼食代など）については

- ・お弁当を持参。交通費はなし。
- ・給食を食べた（一食：約400円）など、比較的家から近い学生が多かったので、交通費はそれ程かからなかったようである。しかし、宿泊が必要な学生は、一泊約500円、講習会や研修会に参加するための訪問先への費用は個人によって違いがみられた。

(ヘ) オリ、エヴァについて、まず学内でのオリでは、

- ・実習録等の形式を定めて、もう少し全体の席で話をしてほしい。
- ・自分の行動すべき時期がいまいち分からなかった、など。
- ・エヴァでは
- ・実習の内容や様子など、いろいろな施設の状況を知ることができてよかった。
- ・個人発表ではなく、少人数グループでの発表の方がよい。
- ・単調で飽きてしまうなど、学生によって捉え方の違いがみられた。

また実習先でのオリでは

- ・事前に活動内容、出勤についてなど、実習概要の説明があった。

という意見もあったが、大部分の学生は実習初日など実際に実習が開始されてから行われていたようであった。

そしてエヴァでは

- ・とても丁寧にやっていただいた。実習担当の先生や職員の方々が親切にいろいろお話を下さった。などエヴァの時間を設けてくれた施設や、様々な活動

の中でアドバイスや助言をしてくれた施設もあるが、特に何もなかったというところもあった。

さらに(ト) 楽しかったこと、嫌だったこととしては楽しかったこと

- ・子ども達との触れあいや、母親とのコミュニケーションなどを通して、より広い視野に立つことができるようになった。
- ・乳幼児だけでなく、小学生と関わる事ができたこと、色々な遊びや、子どもとの関わりに込められた想いを知った。
- ・利用者の方との会話が楽しかった。
- ・今までになかった体験（子育てサークル、産まれたばかりの赤ちゃん、様々な行事やイベントなど）が出来たこと。
- ・現場でしか得られない様々な情報が得られたこと。そして嫌だったこととしては
- ・空いた時間や、休み時間の取り方がわからなかったこと。
- ・先生や職員の揉め事をみてしまったことが辛かった、などが記されていた。
- 最後に(チ) 日誌に書けなかったことがあったかどうかを書いてもらった。
- ・子どもが来る場所だったので、衛生面には気を遣っていると思ったが、不衛生だった。
- ・暇だったこと。
- ・今まで行った実習の中で、一番時間がゆったりしていたように思う。
- ・パートの方は保育士等の資格を持っていなかったこと。
- ・虐待などの事例。
- ・市の障害児に関するネットワークについて。
- ・先生の保育に疑問を感じたことがあったが、批判になってしまうと思いきう書くことができなかった。
- ・職員の仕事や子どもに対する姿勢。
- ・子ども一人一人の背景にある様々な事情。
- ・子どもに対する職員たちの一貫性のない態度。
- ・「隔離」など不適切な言葉の使用、などが言われていた。

IV. 実習報告書「みんなで子育て支援

―少子社会の克服をめざして―

初めての報告書は304ページ（A4）という大部なものとなった。そのなかからランダムに感想を抜き出してみることにしたい。

A (子ども家庭支援センターで実習して)

子ども家庭支援センターのこどものへやに初めて入ったとき、その優しい色づかいに居心地の良さを感じました。親子がゆったりと遊べるように配慮しているのだなと思いました。こどものへやに遊びに来る親子は本当にさまざまで、子ども一人一人によって言葉がけが違うように、お母さん方一人一人によっても、またそれぞれの親子によっても関わり方が違うのだなと実感し、その難しさを感じました。

そうした戸惑いを職員の方にお話したところ、子どもの思いを汲み取るとともにお母さんの気持ちにも配慮していくことの大切さを教えていただきました。どのようにサポートしたらよいだろうか、と自分で考えることもとても良い勉強になり、子どもやお母さんの気持ちに寄り添って考えていこうと思いました。

今回の実習では本当に多くの体験をさせていただき、大変に充実した9日間でした。子ども家庭支援センターと連携をとっている児童館や健康サポートセンターなどを案内していただき、地域の子育て支援というものを直に知ることができました。そして、さまざまな機関と連携と連携をとることで、より良い支援ができるのだなと感じました。

今まで地域の活動について知らないことが多かったので、私自身もっと視野を広げて、いろいろのものに目を向けていこうと思いました。

今回の実習では、主にこどものへやでの観察を中心としながら、センターの役割や職員の方の援助、それに加えて関連機関や区全体の子育て支援施策など本当に幅広く教えていただきました。

こどものへやの観察では、親子で遊べる場というのが目的の場所であったため、保護者の方と子どもたちの遊びを見守りつつ関わっていくことが難しく接し方に悩みました。遊びに来ている親の姿は本当に様々で家庭によって育児の考え方や関わり方が異なる事を改めて感じました。

遊びに来ている方の中には、子育てに関する不安や悩みを抱えて遊びに来る保護者の方などいて、職員の方は、それぞれの思いをしっかりと受け止めその場に応じた対応や配慮をなさっていたことが印象的でした。この実習で職員の方から話を伺ったり、職員の方の接し方や

援助を観察する中でどのように親子と接していくことが望ましいか、少しずつ自分なりの考え方が見えてきたような気がします。遊具なども一つ一つに意味が込められていて環境の大切さや環境の働きかけの大きさを実感しました。

今回の実習では、子ども家庭支援センター以外の施設も見学させていただいたり、様々な経験をさせていだいて本当に貴重な2週間となりました。相談業務についてもそれぞれの先生が専門家という立場からお話をしてくださったため、様々な視点から理解をすることができました。

今回の実習で学んだ事を活かしてこれからも子育て支援について自分なりに考えていきたいと思います。

B (子育てネットワークで実習して)

9日間の実習で、いくつかのセンターやサロンを見させていただき、たくさんの経験をする事ができました。どの現場に行ってもスタッフの方があたたかく家庭的で、利用者の方もとてもくつろいでいらっしまったのが印象に残っています。自然と笑顔になってしまう空間でした。スタッフの方の笑顔とあたたかさや、お母さんたちの安心感からそういった雰囲気ができているのかなと思いました。

ネットワークのスタッフ・サポーターの皆さんが子育て経験者であり、また、ネットワークが民間の団体であることもあり、スタッフとお母さんたちの距離が近く、思いを共有しやすいのかなと感じました。私にはその双方の関係がうらやましく感じられましたし、子育て経験者だからこそできる子育て支援の形を見たような気がしました。

ネットワークで行われている事業は、たいてい「保育所や幼稚園でできないことをカバーする」というお母さんたちの目線から提案・計画されているものであり、大学で勉強しただけでは思いつかないようなことばかりでした。今の私たちにできる子育て支援は、もっと違った形なのかもしれないと思いました。

実習中、お母さんたちとお話をする機会がありました。今までは大きな子育て支援センターが地域にあればいいのになと思っていましたが、お母さんたちは(特に月齢の低い子どもをつれていると)大きいところは敬遠してしまうとおっしゃっていたので、びっくりしました。そういった声が反映され、地域に小さくてもたくさんのセ

ンターができていけばいいと思いました。

実習の中で何度か事務所で作業をしました。子育て支援センターなどの現場がうまく機能するように中枢機関として事務所があって現場を支えているということをはじめで知りました。「子育て支援」というと「子育て支援センター」と考えがちで、とても視野が狭かったように感じます。子育て支援はもっと多様で、もっと身近なものだという認識を持って、これから勉強をしていきたいと思いました。

C (児童館で実習して)

今回の実習では、児童館の活動内容をより具体的に学ぶとともに、その重要性を非常に強く感じました。私も小学生の頃、児童館の放課後生活クラブに入っていたため、児童館の様子については知っていました。しかし、実習を通して職員としての立場から児童館を見ると、その活動内容の幅広さに改めて気づくことができました。

また、今回の実習先であるつばき児童館では、午前中の育児支援事業にもとても力を入れていたため、私も毎日様々な母子サークルに参加し、実際に母親たちの声を聞く機会も多かったように思います。こういったサークルや児童館での企画に参加する母親たちを見てみると、子育てに関する事への関心は非常に高いようで、児童館のような場を必要としている母親が数多くいることがわかりました。中には、別の地域に住んでいるにもかかわらず、情報を得て参加しにやってくる方もいました。児童館でのサークル活動は、地域の親子にとって安らぎの場であり、また、地域のつながりを深め、後に母親たちの自主的な活動へつながっていくという意味でも、本当に大きな役割を担っているのだと感じました。

責任実習では、布製のおもちゃを作り、それを使って親子のふれあい遊びや手遊びを行ったのですが、新しいことを吸収しようとする母親たちの熱心さはとても強いものでした。

生活クラブにおいては、先生方のめりはりのある指導と、一人一人の子どもを真剣に温かく受け止めようとする姿勢が非常に印象的でした。今、子どもを取り巻く環境は複雑な部分も多く、児童館の子どもたちが背負っている境遇も様々なものがありました。何気ない会話の中では、自分の家庭の事情をそっと話してくれる子どももいて、私自身もいろいろなことを考えさせられました。子どもたちが抱える問題にどこまで介入するかというこ

とについては難しさも感じましたが、その子の現状を率直に受け止め、気持ちに寄り添っていくことが大切だと思いました。

児童館という場は、誰もが来たいと思うときに自由に來ることができます。裏を返せば、利用者が児童館に魅力を感じなければ、児童館には誰も集まって来ないこととなります。児童館が活気に満ちた魅力的な場であることを知ってもらうには、誰かが来るのを待っているだけではなく、こちらからも地域に働きかけていくことがとても大切なのだと思いました。

地域の人々と支えあいながら、魅力ある児童館づくりについて真剣に考え、色々な試みをしている職員の方々の姿が強く心に残っています。時代のニーズに沿って児童館の役割も多様化してきている今、地域の様々な機関が連携し、子どもにとってより良い環境をつくっていくためには今後どんなことができるのか、私自身も考えていきたいと思いました。

D (児童センターで実習して)

私は自分自身、児童センターを利用した事は無かったのですが、実習をしてみて、地域でこんなに遊べるところがあったことを知りました。

今までの実習と大きく違っていたのは、何よりも自由だという事です。職員は、利用者を動かすのではなく、時間と場所の提供、そして助言など、サポートの存在である事。最低限のマナー以外は自由に活動という事で、初めはどう動くべきか、何が出来るのか戸惑いましたが、利用者の方と十分に関わり、要求が出てきたら対応し、やりたい事があればしっかりと裏でサポートするという姿勢にしだいに慣れていきました。

支援というのは、本来自分が引っ張っていくものではない、押し付けではなく何を求めているのか、どういう状況かを認識してはじめて応えられるのでしょうか。どうしたらそれを知る事が出来るのかといえば、やはり交流を持ち信頼関係を作っていくことなのだろうと思います。

また、今までは「子どものために」という視点でしたが、ここでは「子どもを持つ親のために」という視線だったのが新鮮でした。

この児童センターには、乳幼児・親・小中学生と、色々な人と関わる機会がありました。色んな悩みを聞いたり、争いを見ることもありました。知的な障害のある子や、人間関係がうまく作れない子もいました。それでも毎日

センターに来る姿を見ると、センターの大切さを感じます。

皆利用の目的はさまざまだけれど、ここを自分の居場所としてくる子が多いと感じました。センターが、ここにくればこの人がいる、ここにくればこんなに楽しい事があると感じ、来るのが楽しみになるような、身近な存在であればいいなと思いました。

E（児童センターで実習して）

今回実習をさせていただいた新潟市児童センターは私の通っていた小学校の隣にあります。なので私も小学校の頃は、よくこの児童センターへ遊びに行き、お世話になっていました。しかしながら、施設自体は変わっていませんでしたが、やはり利用する側と援助する側とでは見方もちがうということを実感しました。

児童センターには乳幼児さんから小学生、ボランティアさん、子どもたちの家族の方のように様々な年代の人たちがたくさん訪れます。登録制ではないので、毎日遊びに来る子もいれば、家が遠いので土日だけ遊びに来るといふ子、市民会館の中に児童センターがあるので、お母さんが上で会議や集会の間、遊んで待っているという子もいました。毎日ちがった子どもたちの姿を見ることができ楽しかったです。

職員の方は児童センターが子どもたちにとって、学校とも塾ともちがった場所で、色々な小学校から色々な学年の子たちが集まるので、この場所での子どもたち同士の交流も、子どもたちを成長させているとおっしゃっていました。子どもたちが「楽しかった、また遊びに来たい」と思える場所に常にあってほしいという思いを先生方は持っていました。

また「赤ちゃんルーム」や「幼児ルーム」といった子育て支援活動のイベントには、たくさん子どもたちとお母さんたちが参加していました。家庭の中では、子どもとお母さんが一対一の関係になることが多いのですが、こういったイベントに参加することによって、子どもが他の子に興味を持つようになったり、お母さんたち同士の関係もでき、良いきっかけとなっているようでした。お母さんたちは子育てで心配なことや悩んでいることを、専門家の先生や、職員の先生に相談したり、時にはお母さん同士で話したりして解消しているようでした。こういった活動や場があることを、もっと多くの子どもを持つお母さんたちが知り、参加できたらいいと思いま

した。

今回、新潟市児童センターで実習させていただいて、本当に多くの人たちと関わることができ、子どもたちとも関わって毎日学ぶことがたくさんありました。また、新潟市内での子育て支援活動の様子も知ることができて、充実した10日間でした。

F（こども文化センターで実習して）

10日間で、さまざまな子どもとスタッフの方々と関わるうちに、子どもの健全育成のためには、地域とその周囲の大人の協力が絶対に必要だと感じた。今回の実習で、本当にたくさん大人の大人が児童のために協力していることを知った。それと同時に、子どもだけでは育ちにくい、という現代社会の厳しさも感じた。

時代と共に社会の形も地域のあり方も親の意識も変化してきたと言われる。そうすれば子どもの姿も今と昔では、違ってくるのは当然だ。だから大人もこのことをしっかり認識したうえで目の前の子どもと向き合わなければならない。今の子どもと、自分の子ども時代は置かれた環境も条件も異なるということを入れた上で見守っていくことが大切だ。こうした現実を見ないで「自分の子ども時代は〇〇だった。〇〇できた。」という理想の様なものばかりを抱いて今の子どもと向き合っている、そこからは何も生まれないと思う。理想も大事だけど、今という時代をしっかりとらえる事が大切だ。

健常児も障害児も同じ空間で過ごせるという点がわくわくプラザの良い点だと思った。健常児も障害児も幼い時期からお互い触れ合っていれば、障害のある子の事も、自然な事として受け入れられる心が育つのではないかな。

私はこれからますます広がると思われる統合保育に大きく期待していた。しかし、今回の実習でそれも簡単なものではないということを感じた。両者がただ同じ空間にいるだけでは何も生まれないのではないのか、と思った。確かに面倒を見てあげる子どもの姿も見られたが、それとは逆にダウン症の子のことを差別し、非難している児童も何人かいた。

障害のある子は、スタッフの方に見守られながら楽しそうに遊んでいた。だからスタッフとの間にはしっかりと信頼関係ができあがっていて、それは大変良いことだが、すると今度は逆に健常児と障害児との距離がどんどん広がってしまうのではないかな。ならば両者をもっと遊ばせれば良いと思うが、それも現実的に少し厳しい。

安全面からも大人の目がまだ必要だし、一人遊びが好きで他人とは遊びたがらない自閉傾向の子どももいるし、健常児も既に遊び仲間が決まって自由に遊んでいるのだから……。

今後、これからの課題とどう向き合っていくべきか、今の私には分からないけれど今回の実習のおかげで、統合保育といってもそう簡単に健常児と障害児の壁をなくすことのできるものではないことを感じた。新たな課題が見つかっただけでも、今回の実習は収穫があった。

G (知的障害者授産通所施設で実習して)

私が実習させていただいた園は、市内の同様な施設の中でも障害の軽い方が多いということで、想像していた以上に自分自身で行動する場面が多く見られました。ただ自分がやりたいという意思はあるけれど思うようにいかなかったり、周りの理解が得られないばかりにできないという現状がありました。

私が特に感じたことは、障害があるということで家族や周囲の人がなんでもやってくれたり、危険などからも守ってくれるので、私たちが日常で経験していることを経験していないためにできないことが多いということです。園ではクラブを通して様々な経験をしたり、月1回行われる利用者会議の中で、実演をして犯罪から身を守る方法を教えていました。

また、指導員は利用者の支援について考えていくばかりではなく、知的障害者授産施設は経営的な側面ももっているため、利用者がせっかく作ったものが売れるように考えたり、何をすれば売上げが伸びるかなども考えていく必要があることも学びました。

実習を通して、援助することが、ただお手伝いするのではなく、どのようにその方の能力を引き出し、生かしていくことができるか支援していくことの大切さを知りました。とても楽しい実習となりました。

H (心身障害児通園ホームで実習して)

私は以前にもこちらの施設で実習させていただいたのですが、半年ぶりに子どもたちと再会し、前と比べて子どもたちの成長が非常に感じられて、充実した実習にすることができたと思います。

言葉が出ていたり、自我が芽生えて何をするにも反抗してみたりなど、みんなそれぞれ成長していて驚きました。半年でも成長する子はぐんと伸びていて目に見えて

感じとることができました。ある男の子が以前は言葉を全然話していなかったのに「ママ」と言っている姿に驚きました。また、お母さんにすぐ八つ当たりをしてしまい、そのイライラした気持ちをどうにか先生に伝えようと努力している姿が見られて、その気持ちがこちらにも伝わってきました。

自閉的傾向があり、うまく言葉で伝えられない分、大声で叫んだり、顔をのぞきこんだりして自分の思いを表現しようとしているのだろうと思いました。ことらの言っていることにうなずいたりして、理解できている子が増えていて、繰り返し言葉掛けをしたり、根気強く関わっていけば少しずつ言葉を理解していくことができるのだと学びました。

音楽療法をやる前に、自分で椅子を並べて準備をしたり、先生たちがいつもやっている事をよく見ているのだと思いました。次に何が始まるのかということを理解できていて、子どもたちも日々の積み重ねで学んでいるのだということがわかりました。

一人一人個性があり、障害の状態も異なるので、いろいろな援助のしかた、言葉掛け、関わりかたを身に付けておくことが大切だと学びました。何が好きなのか知ったり、得意な事は何かよく見たり、一人一人について理解していくために、全体に目を配り、いつでも子どもたちのことを観察していくことが必要だと実感しました。そこから、関わりかたのヒントが得られるだろうと思います。

今回の障害児との関わりは、今後必ず役に立つと思います。次へ生かしていきたいと思います。

I (小平児童相談所で実習して)

児童相談所での実習を通して、児童相談所の業務について詳しく教えていただき、これからの課題である関係機関との連携や地域とのかかわりや仕組みについても知ることができました。また、子どもや家庭に関する問題の現状を知り、法律の範囲内でしか動くことのできないというジレンマや葛藤の中で、児童福祉司の方々が抱える相談の多さ、対応の難しさ、問題の重みを感じ、理解することができました。

今問題になっている虐待に関しては、親や子どもという個人の問題だけではなく、背景には様々な問題があり、人の不安定な心を生んでしまう社会全体の問題も深くかかわっており、何が悪い、誰が悪いと一概に言うことは

できないというように感じました。その中で、子どもの幸せを第一に考え、子どもを守っていくことの大切さを改めて感じ、これから私たちがかわっていく親や子どもの様々な面から考えられる"子育て支援"について、私たち一人一人がどこに重点を置きかわっていくかということが大切ではないかと思いました。

今まで知らなかったことを知り、考え、感じ、貴重な経験をすることができました。今回、学んだことを生かし、これからはもっと社会全体に目を向けていけたらと思います。

J (山形県福祉相談センターで実習して)

今回、日本でも珍しい、統合された福祉センターで実習させていただき、児童福祉に関する分野は授業などで勉強していましたが、他の分野(特に婦人相談)では知らないことが多く、新しいこと、また支援費制度や、山形の現状などたくさんのことを学ぶことができました。

児童虐待に関しては、実際のケースを読ませていただき、TVの画面上ではなく、自分の身近なところで虐待が起きている事を知り、今まで以上に虐待について考えさせられました。また、虐待をみつけても、虐待している側が自分が悪いとわかっている人と、悪くない、たたく事はしつづである、これでよいと思っている人と二通りあり、その見極めが大事であり、難しいとわかりました。

実際、判定業務で使用する知能検査(発達・人格など)を使わせていただいたり、ソーシャルワーク、インターワークの概要で、相談の受け方、聞き方、注意点を教えていただき、私にとって将来実際に役に立つことばかりでした。

保護所の実習では、子どもたちがもっと心に傷を持ち、あれていたり元気がなかったりしているのではと思っていました。しかし子どもたちは、とても明るく私が逆に元気づけられました。子どもたちの笑顔を取り戻した職員さんたちの力はすばらしいと思いました。そして、子どもたちがいつまでもこの笑顔を決やさないでほしいと思いました。そんな元気な子どもたちも"別れ"というものに敏感であったことが印象的でした。

施設主義の日本が、里親ケアなどの充実をはかり、子どもたち一人ひとりが尊重され、より愛情をあたった家庭を感じとれる社会になってほしいと思います。

K (東京都児童相談センターで実習して)

12日間の実習の中で、現実のケースの重さを実感しました。一度だけですが、面接に立ち合わせていただきました。ケースの処遇や背景を知った上で、本人に会ったのは初めてで、複雑な思いと共に、現実であると改めて感じました。その動揺を表情や態度に表すことは出来ないで、冷静さと感情に流されない精神力が必要だと思いました。

実習に入り、福祉司の仕事の多さや、求められる能力の多様性に驚きました。一つ一つの問題も簡単とは言えない状況ですが、複数のケースを同時に把握して、決定していました。

「通告があったのに何もせずに防げなかった」という報道により、怠慢な印象を持っている人もいるかと思います。私もそのように感じていました。しかし、実際の様子を知ると、そんなことはありませんでした。二週間以内には、必ず受理会議を行い、調査をしています。その結果、相手が調査に非協力的であるなどにより、調査が思うように進まないことはありますが、児童の最善の利益のために働きかけていることが十分に伝わってきました。処遇会議などを通して、子どもの問題行動を責めるのではなく、その子の置かれている環境に目を向け、ここにいたるまでの過程や原因を調べ、その原因を解消する働きかけが、大切だとわかりました。

12日間という短い期間では、一つ一つのケースについて考える余裕がありませんでした。沢山のケースを見て、私が福祉司だとしたらどのような処遇にするかなど、深く考えられなかったもので、これからも考えつづけていきたいと思います。また、児童福祉に関する知識の乏しさを実感せずにはいられませんでした。

実習で感じた気持ちを大切に、これからも学んでいけるようにしたいと思っています。

L (母子保健センターで実習して)

この実習を終え、私は今一度育児支援とは何かを考え、視野を広げることができました。その対象が全ての親であるという大きな枠組みだということ、実際で見、難しさも学びました。

明らかに助けを必要とする人に手を差し出すことは誰にでもできることかもしれません。しかし育児支援とは、1歳6か月児健診や子育ての会、マタニティー・スクールなどでも見られたように、全ての親の些細な疑問や不

安も受け止め解決することであり、そういった積み重ねが重大な事態を防ぐ第一だと思いました。

そして、全ての親の中から、本人の助けを求める声はもちろんのこと、本人が助けを必要としていなくとも、子どもの健全な成長を第一に考えた上、支援すべき人を見つけ出し、声をかけていくことも必要だとわかりました。また、そういった状況、例えばこの親子は会への参加が必要なのではないか…という判断力も必要とされる仕事だと思います。それを言われたことにより大きなショックを受ける親もいるだろうし、子どもの人生も変わってしまうかもしれません。重大な役割を担っていると感じました。

だからこそ、各会でのカンファレンスでは、1件1件のケースについて深く話し合わせ、母子保健センター内のみならず、各機関ともしっかりと連携がとられています。1人の子どもの育ちと1人の母親の育児を、多くの人と機関が支えようと最善を尽くしていました。

他にもこの実習で考え方が大きく変わったことは、虐待についてです。今までは、虐待をするなんて信じられない…と思っていたのですが、虐待はどの親にも必ずないとは言えないことだと考えるようになりました。子育ての会では、何人かの子育てに悩んでいる母親に出会いましたが、手を挙げてしまうのはいけないことだとわかっているが、つい……という人もいました。家庭の中でのストレス、実家との折り合いの悪さ……それらのイライラが弱者である子どもにむけられてしまうという、母親の孤立ゆえの結果である暴力や、母親自身の成育歴を反映した育児態度、そういったケースを知り、虐待や好ましくない養育態度を改善するには、それらを頭ごなしに否定するのではなく、行動の裏にある背景を受け止め、問題を軽減できるよう後押ししていくことが育児支援なのだと学びました。

この実習で数々の育児支援事業に参加し、今一度育児支援とは何か深く学ぶことができ、とても充実した10日間となりました。

M (児童養護施設で実習して)

私は主に小規模グループでの実習をさせていただきました。宿題をみたり、食事の調理、入浴をみたり、添い寝するなどし、子どもたちの生活にかかわるといふ貴重な体験をさせていただきました。

生活を共に過ごすなか、こどもたちの気になる言動に

対し、どのような声掛け・配慮・指導をすれば良いのか悩みました。注意掛け・間違いを子ども自身に気付いてもらえるようなかわり方・姿勢をとる難しさを痛感すると同時に、子どもたちにかかわる大人の人間性が問われる、非常に責任の重い職業だと思いました。

各家庭・教育機関や関連機関との繋がりをできる限り密にもち、子どもたちにかかる問題・事象、全般への対応など、社会へ巣立つ子どもたちの自立(律)心がしっかりと芽生えるよう、育つようにと、職員の方々は心を砕きつつ働いていらっしゃいました。職員の方々の優しさ、温かさに溢れた対応をはかる一方で、凜とした厳しい態度を取り、子どもたちの自立(律)・将来など子どものことを一番に考えていると強く感じました。

「幼児の発達・発育」や「児童・青年期の心理」「法律」など様々な知識が必要とされ、「子どもが好き」だけでは対応しきれないと思いました。本当に子どもたちのことを思い、愛情をもっていけないといけないのではないかと思いました。食育の面でも調理師の方々が心を砕き、職員全体また地域の方々の理解を仰ぎつつ、園全体・地域で子どもたちを見守ろうとしておられました。

複雑な家庭環境のなか辛い経験などを背負った子どもたちがいるという現実改めてショックを受けましたが、愛情をうけ、またそれを感じつつ、自立を目指し、人を思いやる心をもって伸びのびと成長して行ってほしいと思います。

今回の実習では各棟をまわることができ、多くの子どもたちの明るい笑顔や色んな表情をみることができ、大変良い経験となりました。この貴重な経験をいかし、子どもとかかわる大人の一人として、まず自分はどうあるべきか、自分を見つめ直していきたいです。また、子どもたちにかかる問題について、今まで以上に強い関心をもっていきたいと思います。

V. おわりに

私たちは育児支援専攻の学生たちの実習報告書に「みんな子育て支援一少子社会の克服をめざして」というタイトルをつけてみた。前節で、そのうちのいくつかについてみておいた。

実習した機関の種類については先に表2として示しておいた。みられるように他専攻と比較して多岐にわたっている。「児童館」が圧倒的であるが、「児童相談所」や「子育て支援センター」などで実習した学生も多い。こ

れからの実習先選定にあたって考慮すべき点であろう。

ところで実習先からは「評価表」が返送されてくる。その状況についてみておこう。

まず実習評価表の4項目について、実習先の評価と学生による自己評価とを比較してみよう。(学生の回答数と実習先からの返送数は同一でないことに注意のこと)

表3 実習先の評価と学生による自己評価

項目	評価	評価			
		A	B+	B-	C
実習への取組	学生評価	48	23	0	0
	実習先評価	61	14	0	0
利用者への理解	学生評価	17	48	6	0
	実習先評価	47	28	0	0
指導技術上の問題点	学生評価	9	52	9	0
	実習先評価	34	36	4	0
職員への態度	学生評価	42	29	0	0
	実習先評価	65	10	0	0

ここで、指導上の問題点という項目について、無記入回答者が1名づついた。これは、指導技術に対する学生、実習機関の捉え方の相違を示したものといえよう。この相違について、実習機関の方は、「積極性に欠ける」とか、「声が小さい」からと回答していたことを付記しておこう。

以下、項目毎に詳しくみてみよう。

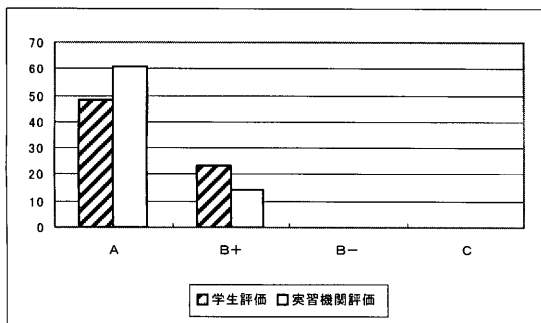


図1 実習への取組

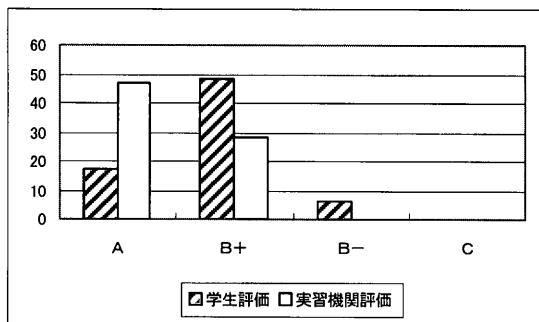


図2 利用者への理解

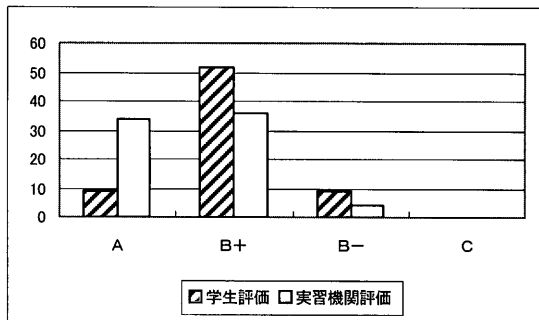


図3 指導技術上の問題点

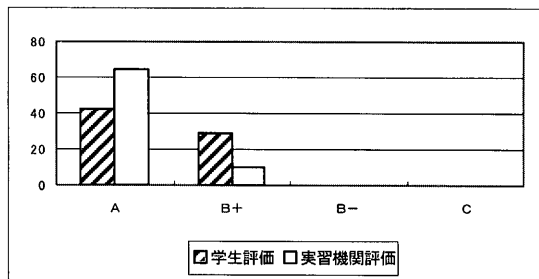


図4 職員への態度

これらについての感想として、実習指導を担当した者としては、学生たちの実習に対する熱心な姿に頭が下がる想いである。これらをふまえて、これからの実習指導に当たりたいと考えている。

また「評価表」には大学への要望を記入する欄がある。実習ノートについて、期間について、教員の訪問について等、これからの実習指導において着実に生かしていきたいと考えている。今回、参考にした文献をいくつかあげておく⁽⁴⁾とともに、各大学からの実習報告書の送付に感謝したいと思う⁽⁵⁾。

次世代育成支援対策は、父母その他の保護者が子育てについての第一義的責任を有するという基本的認識の下に、家庭その他の場において、子育ての意義についての理解が深められ、かつ、子育てに伴う喜びが実感されるように配慮して行われなければならない⁽⁶⁾。

註

- (1) 次世代育成支援対策推進法 第2条(定義)
平成15年7月
- (2) その状況については保延・三角「保育者養成と社会福祉実習—(2)東京家政大学研究紀要第41集所収・2001に記しておいた。
- (3) 保延・三角・深田「幼小教員養成と社会福祉実習」東京家政大学研究紀要第44集(1)所収 2004
今回の育児支援専攻の実習指導にあたっては、当時、院生であり、T.A.として実習事務を担当した吉川さんにも分析に加わってもらった。記して感謝する。
- (4) イ)「社会連帯による次世代育成支援に向けて」ぎょうせい 2003
ロ) 岩淵勝好「次世代育成支援の現状と展望—少子社会への挑戦」中央法規 2004
ハ) 郷地二三子「少子化地域における子育て支援」新読書社 2004
- ニ)「東京都内・子ども家庭支援センター実態調査報告書」東京都社会福祉協議会 2004
ホ) 浅井春夫「『次世代育成支援』で変わる、変える子どもの未来」績文堂出版 2004
ヘ) ジュリスト特集「少子高齢化社会へ向けての法施策」有斐閣 2005
ト) 柏女霊峰「次世代育成支援と保育」全国社会福祉協議会 2005
- (5) イ) 東京国際大学「実習レポート集」第7集 2004
ロ) 龍谷大学「福祉実践に学ぶ—2004年度現場実習報告書」
ハ) 同志社大学「社会福祉実習報告書 2004年度」
ニ) 静岡英和学院大学「2004年度社会福祉援助技術現場実習報告集—未来への軌跡」
ホ) 京都ノートルダム女子大学「社会福祉実習報告集」第3号 2005
ヘ) 共栄学園短期大学「社会福祉実践者をめざして—一介護実習報告書」2004
ト) 日本社会福祉教育学校連盟「社会福祉援助技術現場実習におけるスーパービジョンの体系化の研究」2005
- (6) (註1)の法 第3条(基本理念)

Abstract

We were consider social work practice on the nursery teacher training and teacher training course of primary school in The University of Tokyo-Kasei.

Child-rearing support is in a society with a decreasing birthrate. Dvi. Child Support was installed as a subject of Child Study, and we are now in the charge of training guidance.

The organization of Dvi. Child Study was diversified, and I think that the future prospects of Dvi. Child Support were shown.